魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ　～鉄パイプを持ったランクCの男と５人の妖精～

アレン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ　～鉄パイプを持ったランクＣの男と５人の妖精～

【Ｎコード】
Ｎ９８４６Ｏ

【作者名】
アレン

【あらすじ】
『――――――――――お前らを、背負って生きていく。』

同胞に誓いを立て、彼は歩きだす。

たかがランクＣの傭兵と５人のユニゾンデバイス。

悪事にみを染めた男を、ユニゾン達はどう彼を変えるのか。

注意！！この作品は作者の衝動書きです。更新の目処が全くないッス。それでも呼んで頂ければ、感謝の極みです！！

第一話　～少年の過去～（前書き）

あらすじでも書きましたが、衝動書きです。

ってか作文力無いんで・・・。

それでも読んでもらえれば、嬉しいです。

第一話　～少年の過去～

天災は突然やってくる。

これは天災なのかな～？

はい実は私『転生』しました。っと言う記憶だけ残されて、只今見た目１０歳からやり直してます。

『何でやねん～～！！！！』

と、心の中で呟きつつ。

ミッドの孤児院で育ってまいりました。

生前の記憶は４つだけ覚えてます。

中国人！？

どっかの武将だった！？

やんちゃでした～。

オレイケめ～ん。

・・・・・調子乗りました、スンマセン。ｏｒｚ

まぁ何はともあれ、生前の影響か棒を振るい続け、今では族の団長ッス。

ちなみにステータス（？）みたいなもんです。

名前　申　（シン）

二つ名　赤鬼・鉄パイプ持った赤鬼

身長　１７３～１７５

年齢　只今ピチピチの１９歳！（若！）

魔力　Ｃ＋

とまぁこんな感じです。

管理局とどんちゃん騒いで。

気付けば『鉄パイプ持った赤鬼』な～んてあだ名ついてました。

なぜ団長？体が丈夫です！！（自信アリ！！）

んで、武器持つと生前の名残で妙に振るえます・・・。

特に鉄パイプ！！何でだろう。シックリくるね。

突けば槍。

振れば薙ぎ。

受けとめれば盾にもなる。

・・・生前は棍棒振り回してたのかな・・・。

でも事件は起きた。

ターゲットは目立たない研究施設。

理由は簡単。

・今まで研究施設なんて襲撃したことなかった。

・まぁ、何かあんだろ？

・金

この３つ。

仲間を引き連れ、中へ。

結果

自分以外死にました。

自分も大怪我をしながら、リーダーとして手ぶらで帰る訳にもいかず。

最奥までたどり着いた。

そこでこいつらと出会った。

5体のユニゾンデバイス。

はじめ見て思ったのが・・・。

『こいつら食費少なそうだな～。』

ちなみに次に思い立ったのが『服着ろや。』でした。

こいつらを手土産として持ち帰ることにした。

しかし基地に戻った時には・・・。

基地は無く、待っていたのは死体と紅き水たまりが広がる広場。いや、地獄そのものだった。

『ウオオオォォォォォ！！！！！！』

俺は泣き叫んだ。

一体ずつ。埋めてやり。そして皆の前で誓った。

『誓う。俺はお前らを――――――』

そして現在。

シン

「族やってた頃が懐かしいね～。」

???1
「黄昏てんじゃないわよ。このボケシン！」

シン
「いいじゃん別に」

???4
「ねぇシン～。アレ止めなくていいの～？」

シン
「オレなんかが手伝っても手伝った意味にはならねぇよ。」

???2
「・・・・行くべき。」

シン
「ん～。ソアラが呟くって事は。」

???3
「ちょっと、明らかに対応が違うのはどうしてですの？」

シン
「大した理由なんてなぇよ。ただ無口キャラのソアラが呟くって事はそれほど事が『重要』。もしくは『幸運』があるかもってだけだよ。」

???5
「暴力はなるべく抑えるように。」

シン
「はいはい。お前らをそんな事に使わないって理由で、契約したんだから。」

???1
「フンッ！当ったりまえよ。」

シン
「んじゃ、行きますか。」

オレは目の前で燃えさかる空港火災に飛び込んだ。

第一話　～少年の過去～（後書き）

いかがだったでしょう。

ぶっちゃけこの後の展開も読めてきているでしょう。

テンプレ踏める所は踏ませていただきます！！（スンマセン！！）

第二話　～いざこざの契約～　（前書き）

はやてが出てきます。

六課成立してすぐの頃ですね。

第二話　～いざこざの契約～

「・・・」

「・・・どうしても？」

「・・どうしてもや。」（ニコっ）

「・・・・・いい笑顔ッスよ？」

「せやろ～。」

「・・・」

あの事件から。あれ以来おれは密かにはやてとだけ友達になっていた。はやてが友達を紹介すると言うがおれはそれを断った。

・・・・お前みたいなの、近くにもう一人か二人いる。一人でいっぱいいっぱいだ。

「・・・。」（ニコニコ）

「・・・もういいだろ？」

「もう少し粘らせて！！ってかなんでダメなん？」

「逆に言う。なんでオレ何かを管理局に入れようとする？いつ辞めてもいい助っ人でいいじゃん。捨て駒としては最高だぜ？」

「ッ！！」

パシッ！！

はやての右手が頬に当たる。

「・・・ウチは、ウチの作ろうとしてる局で・・・局員をひとりたりとも・・・捨て駒なんて思ったこと無い！！生還率１００パーセント、『絶対生きて帰ってくる』がもっとうや。ウチにそんなん捨て駒なんて、イラン。」

「悪かった。訂正しよう。・・・外部協力者。またの名を犬として」

ドゴっ！！

次は左ストレートの

「・・・次はグーよ。」

「いやっ、もうグーだった。」

「せやったっけ？まぁ、ええわ。」

顔面にメリ込んだグーを引き抜き、ハヤテが座り治す。

今の状況を遅いながら説明しよう。

はやてに呼び出されまして、今は町の喫茶店。

はやてはオレをスカウトしにきたらしい。

けど

「裏の仕事はオレが持つって言ってるんっだ。いいじゃんそれで。あるんだろ？２つや３つぐらい。」

「あんた！！・・・ええ加減にせんとシバクで。」

「・・・ホゥ。随分な自信だな。悪い行いはしてない。っと。」

「・・・どうせ調べたんやろ？ウチの事。シン君がそないな奴とは思ってなかったわ。・・・・悪くないなんて思ってない。確かにウチの子達が昔、魔力蒐集をしとったのは事実や。せやけど、あれはウチらが背負っていくべき罪や。アンタや他の人にとやかく言われるつもり無い。」

「・・・フム～自覚はあると。なら先ほどの言葉、それをもう少し突っ込んで聞いてもいいか？」

「・・・何をや？」

「『生還率』っと言ったな。なら、敵の生還率は。・・・如何ほどだ。」

「・・・どういう意味？」

「『敵は殺してんのか？』『生きてるのか？』って聞いてんだよ。」

「そんなん、管理局局員は必ず皆非殺傷設定になってる。そんなハズ・・・・。」

「ハズ、何だ？」

「・・・・。」

「ためらうということは、『そう受け取ってかまわない』って事だぞ。」

「なら、どうなん？」

「お前が思い当たるんその０．１％の中に・・・・・オレの同士が入ってるとしたら・・・・。ってなぜ思わねーの？」

「ウチの局員の誰かが『人殺し』言うてるんと一緒ですよ？」

「そうかもな。」

「・・・そんな・・。」

「ないと言い切れるか？とにかく、オレは民間協力者としてなら協力してやってもいいぜ。それだけだ。」

「・・・局が嫌いなん？」

「・・・ちょっとな。いい機会だ。はやて、昔話してやる。」

俺は族であったこと。それから生前イケめ～んだったことと基地が襲撃されてた事を伝えた。

「・・・・驚きで怒りが吹っ飛んだわ～。シンの初めて過去聞けたわ。」

「まぁ、それはそうと、事実かどうかはわからねぇが、最近になって、手掛かりをゲットした。オレにとって最初の情報だ。・・・最

初で最後の、手掛かりだ。それしかねーんだ。だから信じるしかねぇ。」

「手掛かり？襲撃した人たちの？」

「ああ。・・・となりの村人の証言だ。『『白い悪魔』と『金色の死神』が飛んでいった』ってな。空を飛ぶ。そして白やら金色って事は魔導師としか思えないんでね。」

するとはやての顔がサァ―っと血の気が失せて行く。

「・・・わかった。・・・なら今日は帰るわ。ウチもちょっと調べてみるわ。怒ったりビックリしたりして、ごめんな。」

「おっおう。・・・なかなかいい左持ってんじゃん。また今度な。」

そういってはやては席を立ち、荷物をまとめ立ち去る。

「ほなな。また連絡するわ。」

「おう。」

はやてが人ごみに紛れる頃

「・・・なるほど。」

シンは言葉を漏らす。しかしその言葉をきく者は誰もいない。

――――――――はやてside

「ハァ、ハァ、ハァ」

ウソや。絶対ウソや。そんなんウソや。

「ハァ、ハァ、ハァ」

なのはちゃん、フェイトちゃん!!

「ハァ、ハァ、ハァ」

私は路地裏に入り携帯アドレス帳を必死にカチカチ押していた。

（あ～もう。こんなときにミスる。）

もう一回打ち直しや。

こんなにパニクっていたからかもしれん。

後ろにいたその張本人に気付けなかったんだと思う。

――――――――――はやてside

「・・・しつこく勧誘してきて、オレの過去をしゃべった瞬間、いきなり帰る。それにそのパニクりよう。・・・・はやて。お前何か隠してるだろ？」

「っ！！」

はやてがこちらをゆっくり向く。どうやらパニクっていて気づいていなかったようだ。

「・・・その情報を引き換えに、入ってやってもいいぜ。」

「・・・・。」

「だんまりか。・・・ならこうしよう。オレの過去、あの事件を起こした奴らを探してくれないか？」

「えっ？」

「頼む。」

俺はたのみこむように頭を下げた。さすがにはやてもビックリである。

「なんでそこまで必死になれるん？」

「・・・・仲間のため。じゃダメか？」

「・・・わかった。けどウチの隊にいる間はウチの言うこと、絶対聞いて。調べ物はウチがする。シンがするときはウチも付き添う。どや？」

「わかった。交渉成立だ。」

こうして俺は、はやてと条件付きで契約をしたのであった。

第二話　～いざこざの契約～　（後書き）

なんか・・・・。いいのかなぁ？

こんな感じで書いていきます。

ユニゾン達は、もう少し後ですね。

っておもったら次出てきます。

（しっかりしろ！！オレ！！）

それでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9846o/

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ　～鉄パイプを持ったランクCの男

2010年11月18日05時13分発行